

のことをよく理解できた教育実習」と表現している。

「教育実習は、実習中はですね、すごいやりがいというか、教員っていいなって思ってたんですよ。実習に参加してる時には、もう教員より別の道の方のことをよく考えていたので、教育実習に行く意味を考えてて、考えながら実は行ったんですけど、実際行ってみて、その子どもとうまく接してたかどうかっていうのはまた置いて。やりがいのある仕事だになっていうのと、いい授業ができた時の手ごたえっていうのはすごい感じて、教員になってもいいのかなって言った気持ちも一度盛り返してきたんですけど、のちのち考えてみて、やっぱり教育実習の時って本当に寝れないというか。時間もほとんどなくて休む時間というか。もうこう毎日これを仕事にしてこう追い詰められていくと、ちょっと厳しいかなっていったのが、またのちのちに冷静になって考えたら、そういう気持ちもあって。やりがいとか教師の楽しさっていったのは感じたんですけど、その反面、ちょっと労働の厳しさというかあとは子どもとかかわる難しさというのを感じて、良くも悪くも教員のことをよく理解できた教育実習にはなりましたね。」

就活と並行する中で、教育実習のたいへんさがさらに極まってくる例もある。DとBがその例であるが、公務員試験等との両立の困難さをBは以下のように語っている。

「えーっと死ぬかと思ってました。ちょうど試験と被ってて、その面接とか試験とかとしっかり重なって。私は〇〇県で教育実習を受けてたので、毎週末帰ってきました、東京に。金曜の夜、最後の新幹線に乗って戻って来て、どういう風に面接を受けるとかっていう感じだったので、しんどさはMAXだったですね。どう対処したかって言われると、本当に、気合い、みたいな。で、教育実習に行く人は一応先生になる人じゃないと、みたいな感じになってるじゃないですか。その就活がどうっていう話も、その実習先の先生とかに相談しづらくて。みんな苦勞してました、他の実習生も。」

「教職一本」を理想化しており、多忙な状況の中で実習を受け入れている実習先に対しても失礼のないように実習生としての好ましいふるまいが求められる。しかし、就活のタイミングがまさに4年生の実習期間と丸かぶりしている現状がある。「複願」のひとつとして位置づける実習生が増えている中で、現在の就活期間の実質的な早期化・長期化がひとつのネックになっているようである。

教育実習で実感する「教職の困難さ」は、金融機関内定のIにとっても、特別なもののように映る。以下の言葉がこれを示している。